



いのちの同伴者

今の世の中は「いのち」が粗末に扱われている。親が子を、子が親を殺す。気に入らないと友人を刺殺する。この広大な宇宙に二つとない人の命を何と考えているのだろう。メディアは「いのち」

「ち」が粗末に扱われた事件を、のぞき見的に報道し、類似事件が起きる。人間の命だけではなく、たくさんの自然の命を人間はいとも簡単に破壊している。自然の命や他人の命を軽ん

じるのは、自分の命を軽んじるにも通じる。これは今、発足の準備を進めている「山口いのちの会」のチラシに書いた一部である。

いのちの同伴者、それは命の創り主である神であり、その神が軽んじられ、忘れられているから「いのち」が



歩いて巡礼した真鍋さん

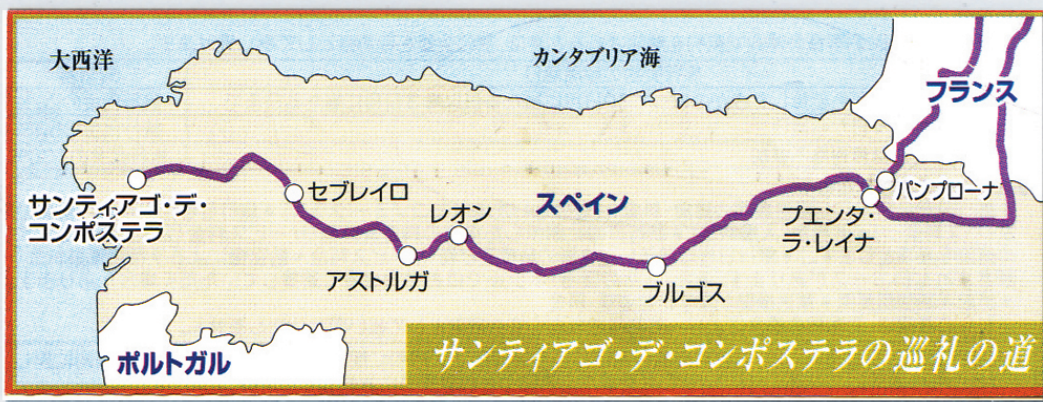
粗末に扱われていて私と私は考える。巡礼、フランスから徒歩でピレネー山脈を越えてスペイン北西端のサンティア

ゴ・デ・コンポステラへ。重い荷物を背負い、二カ月近く黙々と毎日歩き続ける。その中で自分の「いのち」の創り主が神であり、いのちの同伴者であると悟るのではないかと想像する。

だから同じ道を通っても、私のようにバスに乗って足早やに巡礼するのは、巡礼もどきの旅になる。《真の巡礼者》我々二十一人の巡礼団の中に異色の人がいた。山口教会の真鍋孝弘さん。彼は県庁マンであったが、定年退職後、サンティアゴ巡礼を考え、準備した。まず、スペイン語の勉強を始め、それからリュックサックに砂袋を入れ、歩いて巡礼するリハールを一年以上続けた。そして、我々とパンブローナまで行動をとるにし、その後は一人で三十一日間かけて歩いてサンティアゴに行ったのである。私より四歳若い六十

二歳。あつぱれ!! 脱帽!! である。報告によると、アルベルゲという巡礼者専用の宿が各地にあり、毎朝七時に宿を出て、午後二時ごろまで歩いて次の宿を見つける。そのアルベルゲで、たくさんの巡礼者と出会い、仲間ができる。真鍋さんも、ドイツ人、フランス人、ベルギー人、ブラジル人、そして日本人と十人ぐらゐの友達ができ、その人たちとの出会いが巡礼の一番の思い出という。歩く距離は大分違うが、巡礼は山登りと共通するものがある。世間の肩書き、貧富、着ているものなどは関係なく、みんな平等の一人の裸の人間。山小屋やアルベルゲは交わりの場。旅の同伴者であり、いのちの同伴者に通じるものがある。人はいくらたくさんいても、交わりを持たない、関わりを持たないなら人間砂漠。物が豊かになり、他人を必

要としなサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼の道いかに見える今の世の中、巡礼は「いのちの同伴者」との出会いという私の考えも、全くの方角違いではないと思う。《足跡》いのちの同伴者という言葉を書きながら、机上に置いてある詩に目をやった。長いので省略して、その一部を「主よ、あなたに従うと決心した時、あなたは、いつもともにいると言われた。しかし、人生の一番つらい時、そこには一人の足跡しかなかった。なぜ、私を捨てられたのか」主は言われた。「私の大切な子よ、足跡がひとつだった時、私はあなたを背負って歩いていた。」(元山口放送取締役ラジオ局長)



要としなサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼の道